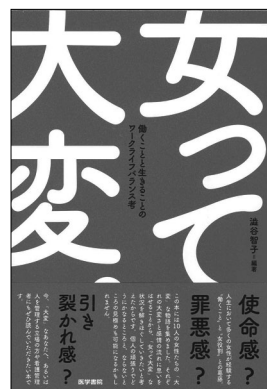


『女って大変。働くことと生きることの ワークライフバランス考』 学生にも考えてほしい 素材に満ちている

編著：澁谷智子／定価：1,890 円(本体 1,800 円+税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



70 年代から 80 年代にかけては専業主婦率が高く、結果的に性別役割分業(男は外で仕事、女は家事育児)が一般的だった。あえて仕事をもつ女性は、よほどの貧困かさもなくば女性解放の覚悟をもつ人とみなされた。まして子どもを預けて働くことは、血も涙もないという指弾を覚悟しなければならなかった。働く女性も専業主婦も、当時は文字通り「女って大変」だったのだ。しかしながら、第二派フェミニズムの勃興期の勢いがそれを後押ししたため、子どもを預けて働くことにはどこかパイオニアの使命感があり、それが大変さをやり抜くエネルギーにもなっていた。

その後、男女雇用機会均等法や男女共同参画法の制定を経て、90 年代から主流になっていったのが、表向きの男女平等と自己選択・自己責任論であった。女だからという理由で言い訳をすることは卑怯なこととなり、男も女もなく自分の責任に帰せられることが増えた。もちろん働く女性の割合は 70 年代に比べると飛躍的に増加したが、その裏側で進行したのが「新性別役割分業」である。男性も家事を分担するかに見えて、実は女性が仕事と家事の二重労働を背負うこととなったのだ。本書でも夫の存在はほとんど見えず、仕事ができる女性ほど家族へのケアと仕事の板ばさみになっていることがリアルに描かれている。これほど過酷な二重の負担を背負いながら、それでも

「女って大変」となかなか言えない留保・ためらいにこそ、本書の生まれた意義がある。

看護職は女性主流の資格として働く女性の先駆者を多く生み出してきたが、フェミニズムが届くのがなぜか遅い職種でもあった。著者の一人がいみじくも述べているが、看護とは性差別がはつきりしている現場なのだという。そうであれば、女って大変という言葉は「それを言っちゃおしまいよ」として退けられてきたのかもしれない。職場の同僚が女性ばかりであることは、時にジェンダー構造を見えなくすることもある。家族との葛藤も「誰もが経験することなんだから」と扱われるかもしれない。女性主導の職場であるがゆえに半ばタブー化された言葉が「女って大変」だったのだろう。

長引く不況下「男だって大変」という現実が生まれたが、年収の男女差は縮まらず、育児や介護といった家族内ケア役割は相変わらず女性に期待され続けている。とにかく、世界の中心で「女って大変」と叫んでみよう、それを誰も責めることはできない。大声で叫ぶことで変わっていくものがあるはずだ。そう思わせるだけの迫力に、本書は満ちている。